

自然と暮らす東京の庭



写真／入江寿紀



東京のスタイリッシュで無機質な人工空間。
そのまっただ中で、私たちがいま切実に求めているのは「自然」です。
自然からしか得られない、かけがえのない大切なもの。
失われつつあるからこそ、その価値を思い知った私たちはいま、
屋根に、屋上に、ベランダに、小さな庭に、
さまざまな「自然」を取り戻そうとしています。
都市の暮らしの限られたスペースの中で育む小さな「自然」。
その可能性を提案します。



下／草屋根をのせたゴミ収納スペース。
建物側から見たところ
左／道路側から見たところ



変えていきたいという強い思いをもつて集まつた人たちによつてつくられた。建築家の山田達也さんの設計によるアトリエの建物には、国産のカラマツ材が使われています。海外からの大量の木材輸入は、他の自然を荒らし、日本の森の荒廃を招きました。カラマツ材の採用には、「少しでも多くの国産材が使われることで森を守ることができれば」という、クライアントの願いが反映されています。

もうひとつ、「都市のヒートアイランド現象の低減に貢献する」ということも、スタッフ用アトリエの建築に際してのクライアントの要望でした。コンクリートの表面温度が50度になるとき、植栽があればそこから10度も低く保てるといわれています。草屋根は、人が環境と共生するための具体的な方策

東京に「草屋根」をつくろう!

美術館スタッフ用アトリエ



田舎の畦に生える多種多様な植物が、屋根から東京のまちに種を飛ばす季節がやつてきました。
「草屋根をおもしろいと思い、草屋根をつくりたいという人が増えれば、少しずつでも環境はよくなるはずです」
草屋根つくりに関わった人々は、そう考えているのです。

東京の静かな住宅地の一軒にある美術館スタッフ用アトリエ。建物に近づいた人たちのほとんどが、思わずそこに立ち止まつてしまふのあいだじつと屋根を見上げていきます。アトリエの屋根は生い茂つた緑が匂いたつような、みごとな草屋根なのです。

コンクリートの建物が建ち並び、道路はアスファルトでおわれ、熱いヒートアイランドと化した東京。東京にかぎらず、いま日本の都市のほとんどがきわめて生き物のすみにくいまちなみつてしまっています。

そのいっぽうで、都會に住む人々が田園生活を夢見る田舎の田んぼや畠には、農薬や除草剤、化学肥料が大量にまかれ、草の種類は減り、カエルやドジョウ、トンボや虫など、小さな生き物たちが激減してしまつているという現実もあるのです。

この草屋根の建物は、そんな状況を

として、いまもつとも注目されているプランのひとつであるのです。

草屋根づくりをまかされた高荷俊峰さんは、平らな屋上庭園はいくつも手がけていましたが、4寸勾配もの急な屋根面を造園するのははじめてでした。

そこで、植栽デザイン、ディテールの考案、人工土壤と排水システム、施工などについて、それぞれのエキスパートの知恵を借りることにしました。

高荷さんの依頼によって、都市に多様な自然をとりもどすランドスケープを数多く手がけている田瀬理夫さんは、屋根を大きな一枚の布団ですっぽりとおおうような草屋根工法を提案しました。この草屋根工法の不思議な点は、屋根に滑り止めを設置しなくともちゃんと屋根の上にのっかっているところです。屋根に滑り止めを取り付けるにはビス（釘）打ちが必要になりますが、ビスを打つと防水の必要上からコーキングが必要になります。すると今度はそのコーキングの耐久性を検討しなく

草屋根に生える草の種類

1年草／イヌタデ、エノコログサ、キンエノコロ、カヤツリグサ類など多種
多年草／ノアザミ、ヨモギ、スキ、ヤマアワ、オオバジャノヒゲ、カンスグなど多種
木本類／アカシデ、クロモジ、クサボケなど。「土に入っている種子から、今後何が出てくるかとても楽しみ！」と、草屋根工法を提案した田瀬さん。



スキとクサイ

草があって虫がいれば、そこには多種類の鳥が飛んできます。
その鳥たちはどこからかまた別の種類の植物を運んでくれるだろうし、
この草屋根からも種子を運んでいくはずです。



上右からカキドオシ、ミヅシル、フキ。下右からヒメタデ、ミソモトノウ、アルツメクワ



上／ハツカ
下／ニオロギ。屋根の上にはカエルモガフカクも住んでいます



ングリをはじめ、タケやざくら木本類の実生苗が混じったものなどが、野菜店のあいだに移植されました。仲田種苗園の仲田茂司さんが、無農薬で除草剤を使っていない休耕田を借りて、小さな植物を散歩の途中で目にできる機会も増えるかもしれません。

「竣工当時の3月、基礎き屋根のような枯草色をしていた草屋根は、5月の連休頃にはいっせいに芽吹き始めて、まるで野原にいるような感じでした。屋根の梁に腰を下ろすと、切妻屋根の傾斜はちょうど河原の土手みたいですね。風が吹いてくると草がささやさやとなびいて、いつまでも座ってみたいような気持ちになるんです」と高荷さん。

いまころは、スキの穂が揺れ、コオロギやカネタタキなど虫の音が、建物のそばを通る人たちに届いているかもしれません。

これまでにも、草屋根をいろいろなところで試みている田瀬さんは、屋根の上に茂る草の種類にもこだわりました。昔から田舎の畦に生えていた多種多様な日本の植物。東京に運ばれてきたのは無農薬の休耕田の植生でした。「有機栽培」とよんでもよい草のターフには、1年草主体のもの、多年草にド

さがりました。これまでにも、草屋根をいろいろなところで試みている田瀬さんは、屋根の上に茂る草の種類にもこだわりました。昔から田舎の畦に生えていた多種多様な日本の植物。東京に運ばれてきたのは無農薬の休耕田の植生でした。「有機栽培」とよんでもよい草のターフには、1年草主体のもの、多年草にド

てはならなくなる、というように心配の種が次々に増えています。田瀬さんがデザインした草屋根は、ちょうど屋根の上に布団を干すような具合に、どちらかの側にずり落ちることもなく、びたりと屋根に張り付くように考案されています。ヤジさんキタさんの振り分け荷物のようにバランスをとっているのです。

草屋根に使われている人工軽量土壤（アクアソイル）がきわめて劣化していく性質をもっているということも大きな特徴です。コンテナで植物を育てる場合、ときどき土の再生が必要になりますが、屋根の上の土を取り替えると根は、そこから先は、自然の中の草原と同じように、ひとりでに芽吹き、生きなくしてはなりません。屋上緑化のアクアソイル工法で実績のある池上靖幸さんによつて、そんな植栽の基盤ができるありました。

東京「上目黒住宅」 まちに緑をとりもどそう

写真／入江寿紀

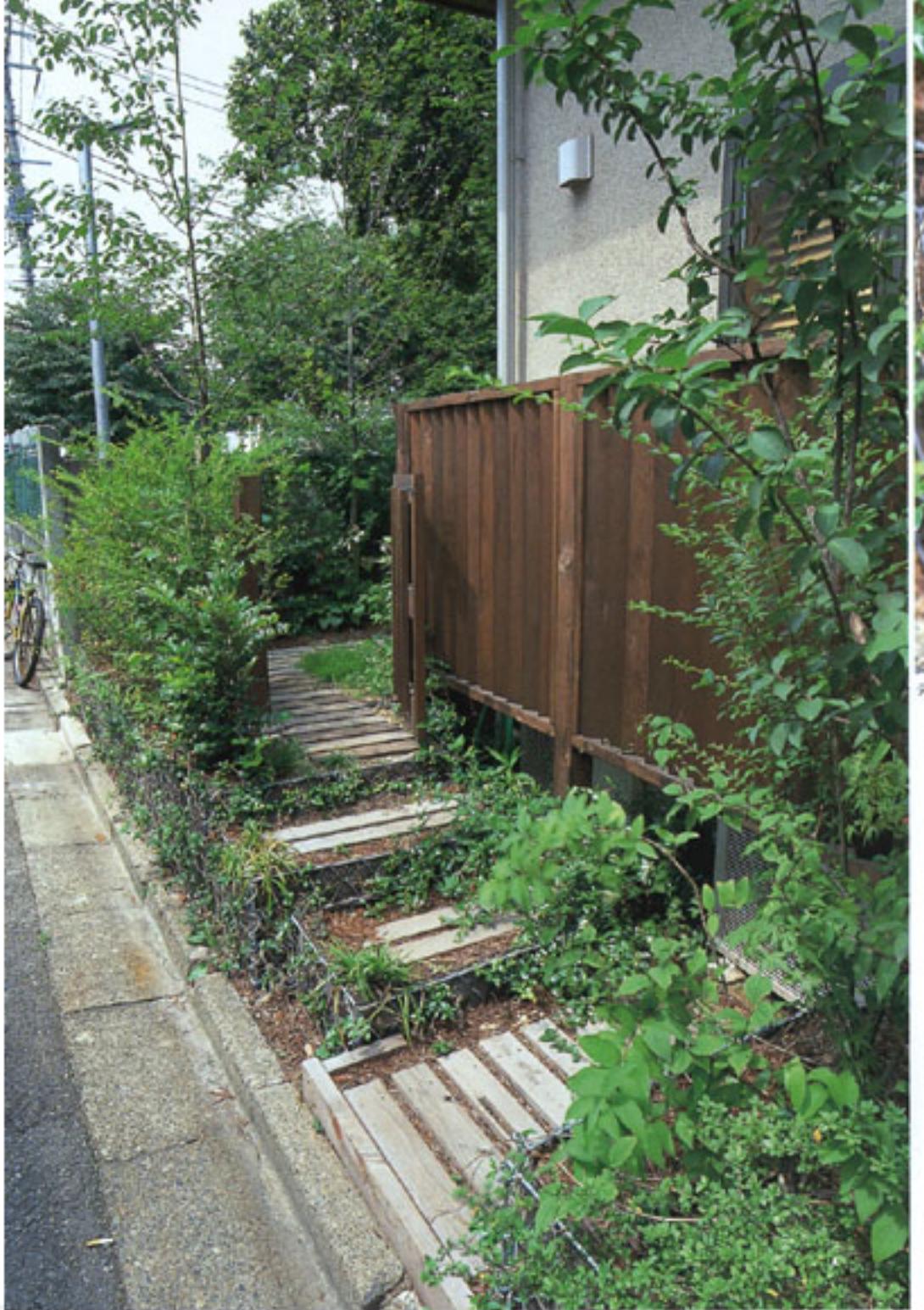
敷地にゆとりのない都会の住まいでの野山のような豊かな自然とふれあって暮らしたい――。

そんな願いを実現した田瀬理夫さんの設計とデザインです。元気に育った植物が家をおおい、お隣りとつながって、やがてそこに緑のまちが姿をあらわす。ひとりひとりの小さな庭が、エコロジカルな社会をつくっていく、そんな胸のおどる提案でもあるのです。

「昨日咲いていた花が咲いたり、花が実になっていたり。テイカカズラのツルが足元までどんどん伸びてきたり。植物が身近で刻々と変化していく様子を、毎日楽しんでいます」都市開発事業に関する企画会社、(株)アネクスのメンバー佐々木真紀江さんは、自主事業のひとつ「アーバンハウジングプロジェクト」に参加し、東京のまちで、自分のライフスタイルにぴったりあつた住まいづくりを実現しました。

このプロジェクトによって完成した「上目黒住宅」は中目黒駅から徒歩12分。

そのユニークな点は、まず、「ここ」が3つの世帯の共同住宅であることです。

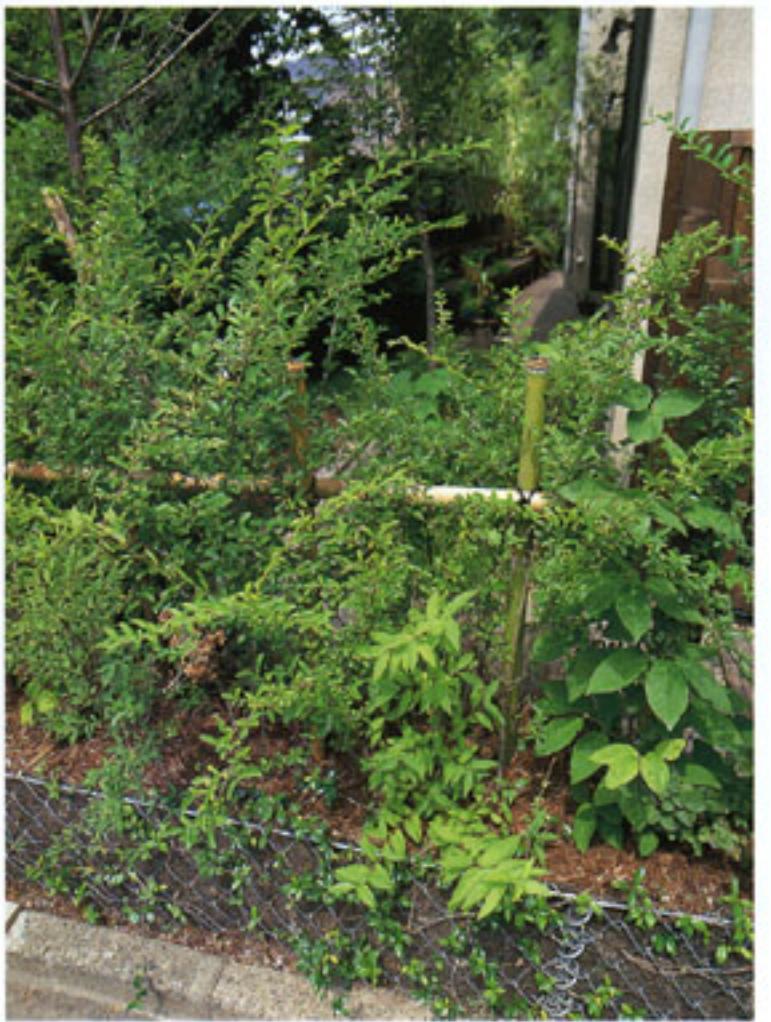


南側の道路に面した前庭

季節を追って、次々に白い花を咲かせるフロントガーデン。家の前を通る子どもたちが、植物の名前をひとつひとつ見ていきます。「いい庭だね」。小学生にはめられました。



ホザキナガマド、シロヤマブキ、ノリウツギ、ガマズミ、ウバナ、フヨウなどが次々に白い花を咲かせます



40代シングルで愛犬2頭と暮らす佐々木さん、80代のご夫婦、50代のご夫婦、という血縁のない3つの家族がそれぞれの独立した区分を所有するコーコーポラティブハウスとして、2階建て住宅が50坪の敷地に新築されました。

住人たちの共通の希望は、日本の野山にあるような自然を身近に感じられる生活でした。「イングリッシュガーデン」や「和風庭園」ではなく、もっと自然に植物とふれあえる日常です。白い花の咲く樹木と草花で植栽を構成したいという点でも、住人たちの意見は一致しました。季節の移り変わりにしたがって、いろいろな白い花が次々に

咲く庭。都会の小さな庭ですが、そこに暮らす3つの世帯とその友人たちが、いつしょに食事をしたりおしゃべりを楽しんだりできるスペースにしたい。そんなことが庭づくりを開始するまでにまとめられたイメージでした。

庭のデザインを引き受けた田瀬理夫さんは、「フントンカゴ」の工法を用いて、庭に小さしながらも新しい地形をつくりあげました。南側の道路に面した外構には高さのある「フントンカゴ」が並べられています。「フントンカゴ」は、上部だけでなく側面もツタやシンバなどでおおうので、美しい緑の土手のような景色がそこにできあがります。



佐々木家の入口のドアには、2
脚の大木をモチーフにしたガラス
のオブジェがはめられている



2階から見える玄関の草屋根

多様な植物が育つ田舎の町を玄関の上
にもってきた草屋根。階段を上がると、窓
の外のこんなに自然な景色と出会います。



花がなくても、
さまざまな緑の変化を楽しめる
庭です。

人工軽量土壌

ここで〈フントカゴ〉に使われている土は、アクアソイルという人工軽量土壌です。保水と排水のバランスがよく、きわめて管理のしやすい環境をつくります。植物を植え足すのも簡単。



佐々木真記江さん「ベンチにすわってみんなでおンバを食べたりして
います」。正方形の植栽スペースにはソロを中心、ノシラン、キチジ
コウノウ、リュウノヒゲ、ティカカズラ、ギボウシなどが植えられています。

西側の庭

1階建物の床と高さを合わせたデッキ
が、小さなスペースを最大限まで広げて
います。隣りとの境に植えたヤダケがさ
らさらと気持ちのいい音をたてます。

田淵理夫 (たせ りお)

(株)プランタゴ代表
1949年東京都生まれ
千葉大学で都市計画及び造園史を専攻
77年プランタゴ開設
'95年造園学会賞受賞

田淵さんが手がけた「アクロス福岡」のステップガーデンは、博多のまちに自然の山にならった仕組みの環境をつくる大プロジェクトでした。1階から約60mの高さの屋上まで、階段状にデザインされたビルのルーフに、京都・修学院離宮の大割り込みをイメージした多種類の樹木を設置。植物はみごとに成長し、緑会のビルは、いま「天神岳」とよばれるオバららしい「山」に育っています。ほか、千葉県柏市の「アミュザム」など、四季の変化に富み、鳥やトンボがやってくる豊かな自然を都市にとりもどすデザインを提示。新しい時代へ向けて、「理念」を「形」にできる、日本のランドスケープの第一人者です。

セイヨウイボタ、ヒサカキ、イク
ヤカエデ、ヤマモミジ、アジサイ、
シロヤマブキ、ハナゾノツクバネ
ウツギ、キチジョウソウなど



東側のアプローチ

植物がふさふさと茂って、家はよりいっそう家らしくなりました。仕事のあるウイークデーも、出かけるときと帰宅したとき、必ず植物とふれあえます。



東側のアプローチにも、壁面にそつて「フントカゴ」が置かれ、きれいな緑のリボンのようなレイズドベッドができています。
道路から庭に上がる「フントカゴ」の階段には、ティカカズラがこぼれるように育ち、木戸を開けて庭に入ると、小さな池のある芝庭と1階のリビングの床面に高さを合わせたデッキがすっと奥まで広がります。
「玄関を出てアプローチを通り、家の前を歩いて仕事に出かける毎日の生活の中だけでも、野山にあるような、たくさん種類の植物とふれあうことができます。新居に暮らしあじめて、だんだん庭ができるがつてくるのを眺めながら、プロの方たちの仕事によってこれだけ空間の広がりが造つてくるのかとみんなびっくりしました。「こんなふうに暮らしたい」と願っていた以上のものを、田淵さんの設計とデザインが実現してくれたと思います」